

Voici le texte de *Shin-fukatoku* étudié avec Yoko Orimo dans l'atelier de l'Institut d'Etudes Bouddhiques d'avril 2015. *Shin-fukatoku* (*Le cœur n'est pas à saisir*) est traduit en français dans le tome 5 de la Traduction intégrale du *Shôbôgenzô* (*La Vraie Loi, Trésor de l'œil*) de Yoko Orimo (Ed. Sully 2011) p. 79.

Le texte japonais ci-dessous est à peu près présenté en paragraphes comme dans le livre de Y. Orimo, avec quelques indications de pages. Il y a une introduction, une première partie avec l'histoire de Tokusan, puis une deuxième partie avec le commentaire de Dôgen.

Ce texte est le 8^{ème} de l'Ancienne Édition du *Shôbôgenzô*.

正法眼藏第八 心不可得(しんふかたく)

Introduction

釈迦牟尼仏言過去心不可得、現在心不可得、未来心不可得。これ仏祖の参究なり。不可得裏に過去・現在・未来の窟籠をえん来せり。しかれども、自家の窟籠もちみきたれり。いはゆる自家といふは、心不可得なり。而今の思量分別は、心不可得なり。使得十二時の渾身、これ心不可得なり。仏祖の入室よりこのかた、心不可得を会取す。いまだ仏祖の入室あらざれば、心不可得の間取なし、道著なし、見聞せざるなり。経師論師のやから、声聞縁覚のたぐひ、夢也未見在なり。その験ちかきにあり。

I. Histoire de Tokusan (p. 80).

いはゆる徳山宣鑑禅師、そのかみ金剛般若経をあきらめたりと自称す、あるいは周金剛王と自称す。ことに青龍疏をよくせりと称す。さらに十二担の書籍を撰集せり、齊肩の講者なきがごとし。しかれども、文字法師の末流なり。

Histoire.あるとき、南方に嫡々相承の無上仏法あることをききて、いきどほりにたへず、経書をたづさへて、山川をわたりゆく。ちなみに龍潭の信禅師の会にあへり。かの会に投ぜんとおもむく、中路に歇息せり。ときに老婆子きたりあひて、路側に歇息せり。

ときに鑑禅師とふ、なんぢはこれなに人ぞ。

婆子いはく、われは売餅の老婆子なり。

徳山いはく、わがためにもちひをうるべし。

婆子いはく、和尚もちひをかうてなにかせん。

徳山いはく、もちひをかうて点心にすべし。

婆子いはく、和尚のそこばくたづさへてあるは、それなにものぞ。徳山いはく、なんぢきかずや、われはこれ周金剛王なり。金剛経に長ぜり、通達せずといふところなし。わがいまたづさへたるは、金剛経の解釈なり。

かくいふをききて、婆子いはく、老婆に一問あり、和尚これをゆるすやいなや。徳山いはく、われいまゆるす。なんぢここにまかせてとふべし。

婆子いはく、われかつて金剛経をきくにいはく、過去心不可得、現在心不可得、未来心不可得。いまいづれの心をか、もちひをしていかに点ぜんとかする。和尚もし道得ならんには、もちひをうるべし。和尚もし道不得ならんには、もちひをうるべからず。

徳山ときに茫然として、祇対すべきところおぼえざりき。婆子すなはち払袖していでぬ。つひにもちひを徳山にうらず。

Remarque et fin de l'histoire (p. 81).

うらむべし、数百軸の釈王、数十年の講者、わづかに弊婆の一問をうるに、たちまちに負処に墮して、祇対におよばざること。正師をみると、正師に師承せると、正法をきけると、いまだ正法をきかず正師をみざると、はるかにことなるによりて、かくのごとし。徳山このときはじめていはく、画にかけるもちひ、うゑをやむるにあたはずと。いまは龍潭に嗣法すと称す。

II. p. 82.

1. つらつらこの婆子と徳山の相見する因縁をおもへば、徳山のむかしあきらめざることは、いまきこゆるところなり。龍潭をみしよりのちも、なほ婆子を怕却しつべし。なほこれ参学の晩進なり、超証の古仏にあらず。婆子そのとき徳山を杜口せしむとも、実にその人なること、いまださだめがたし。そのゆゑは、心不可得のことばをききては、心、うべからず、心、あるべからず、とのみ思いて、かくのごとくとふ。徳山もし丈夫なりせば、婆子を勘破するちからあらまし。すでに勘破せましかば、婆子まことにその人なる道理も、あらはるべし。徳山いまだ徳山ならざれば、婆子その人なることも、いまだあらはれず。

2. 現在大宋国にある雲納霞袂、いたづらに徳山の対不得をわらひ、婆子が靈利なることをほむるは、いとほかなかるべし、おろかなるなり。そのゆゑは、いま婆子を疑著する、ゆゑなきにあらず。いはゆるそのちなみ、徳山道不得ならんに、婆子なんぞ徳山にむかうていはざる、和尚いま道不得なり、さらに老婆とふべし、老婆かへりて和尚のためにいふべし。かくのごとくいひて、徳山の間をえて、徳山にむかうていふこと道是ならば、婆子まことにその人なりといふことあらはるべし。問著たとひありとも、いまだ道処あらず。むかしよりいまだに一語をも道著せざるを、その人といふこと、いまだあらず。いたづらなる自称の始終、その益なき、徳山のむかしにてみるべし。いまだ道処なきものをゆるすべからざること、婆子にてしるべし。

3(p.83). ころみに、徳山にかはりていふべし。婆子まさしく恁麼問著せんに、

徳山すなはち婆子にむかひていふべし、恁麼則爾莫与吾売餅《恁麼ならば則ち爾吾が与に餅を売ること莫れ》。もし徳山かくのごとくいひましかば、伶俐の参学ならん。

4. 婆子もし徳山とはん、現在心不可得、過去心不可得、未来心不可得。いまもちひをして、いづれの心をか点ぜんとする。かくのごとく問はんに、婆子すなはち徳山にむかうていふべし、和尚はただもちひの心を点ずべからずとのみしりて、心のもちひを点ずることをしらず、心の心を点ずることをもしらず。恁麼いはんに、徳山さだめて擬義すべし。当恁麼時、もちひ三枚を拈じて、徳山に度与すべし。徳山とらんと擬せんとき、婆子いふべし、過去心不可得、現在心不可得、未来心不可得。もし又徳山、展手擬手せずは、一餅を拈じて徳山をうちていふべし、無魂屍子、爾莫茫然《無魂の屍子、爾茫然なること莫れ》。かくのごとくいはんに、徳山いふことあらばよし、いふことなからんには、婆子さらに徳山のためにいふべし。

5. ただ払袖してさる、そでのなかに蜂ありともおぼえず。徳山も、われはいふことあたはず、老婆わがためにいふうべし、ともいはず。しかあれば、いふべきをいはざるのみにあらず、とふべきをもとはず。あはれむべし、婆子徳山、過去心未来心、問著道著、未来心不可得なるのみなり。

6. おほよそ徳山それよりのちも、させる発明ありともみえず、ただあらあらしき造次のみなり、ひさしく龍潭にとぶらひせば、頭角蝕折することもあらまし、頷珠を正伝する時節にもあはまし。わづかに吹滅紙燭をみる、伝燈に不足なり。

7. しかあれば、参学の雲水、かならず勤学なるべし、容易にせしは不是なり、勤学なりしは仏祖なり。おほよそ心不可得とは、画餅一枚を買弄して、一口に咬著嚼尽するをいふ。

正法眼藏第八

爾時仁治二年辛丑夏安居于雍州宇治郡觀音導利興聖寶林寺示衆